キズナエピソード

雪舟エリザ　2話

//とびお自室

//ヴィジュアルノベル形式開始

窓から差し込む西陽が、部屋のあちこちで反射している。

暇つぶしに動画を流してみるが、ちっとも頭に入ってこない。

……脳裏にはエリザのことがちらついてしまう。

室温が高まるにつれて、眠気も強まる……。

……あ、だめだ。

もう、意識、が…………。

…………。

//暗転

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//渋谷・外

［エリザ］

「あー、アナタ！

秋葉原の男ね！」

［とびお］

道を歩いていたら、急に呼び止められた。

振り返った先にいた女の子は、知り合いではないが

見覚えのある顔だった。

［とびお］

「人違いです」

［エリザ］

「あら、アナタ。自分が何者かを忘れているのかしら？

アイデンティティーのクライシスは……危険よ！」

［とびお］

俺の態度など意にも介さず、エリザが後ろをついてくる。

さすがにシラを切り通すわけにも行かず、

俺はため息を一つ吐いた。

［とびお］

「おいおい、なんでついて来るんだよ」

［エリザ］

「ワタクシはワタクシのしたいことをしてるだけよ？

アナタにワタクシチャンサマを止める権利などないわ」

［とびお］

「それは俺の質問に対する答えになってない」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

その日以降も俺は何度もエリザと出会い、

そのたびに付きまとわれた。

何回あしらっても、彼女は聞く耳を持ってくれない。

いや、聞く耳は持っていても、理解する頭がないのかもしれない。

//次ページ

そんなことが何回か続いたある日。

俺は参考書を買おうと、書店を訪れた。

そこでまたまた、エリザと出くわしてしまった……。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//書店・店内

［エリザ］

「あ！　アキバ男！」

［とびお］

「はい、無視無視……」

［エリザ］

「なに？　昆虫図鑑を探してるの？

それとも湿度の本かしら。蒸し蒸し？」

［とびお］

やっぱり、俺の後ろをついてくるエリザ。

俺は気にせず、目的の参考書コーナーで立ち止まる。

［エリザ］

「なんだ、アナタ参考書なんて買いに来たの？

ふ～ん……あぁ、この参考書はやめたほうがいいわ」

［エリザ］

「これは解説が下手でわかりづらいの。

こっちは最新のメソッドを取り入れてて好感が持てるわ。

でも、ワタクシのオススメはこっち」

［とびお］

「え、え、え？

参考書なんて、どれも同じなんじゃないのか？」

［エリザ］

「はー、呆れたわ。呆れ返るわねこの野暮天。

同じに見える中でこそ良書を探さないとだめじゃない。

愚者ペンパルよ！」

［とびお］

んなバカな。

試しにパラパラと参考書を軽く読んで見る。

［とびお］

結論としては、エリザの言うとおりだった。

一方はわかりやすいのに、一方はまるで宇宙語だ。

［とびお］

「それを言うなら取捨選択な……。

お前ってそんな感じなのに、

意外と勉強とかちゃんとやってるんだな……」

［エリザ］

「はあ？ちゃんとなんてやってないわ！

ワタクシにかかれば

この程度のお勉強なんてハミガキ前なのよ！」

［とびお］

「起きたらすぐ磨く派なんだな。」

［エリザ］

「まったく仕方ないわね。

ワタクシチャンサマが特別にオススメを選んであげるわ。

感謝感激しなさい！」

//暗転

［店員］

「6740円になりまーす」

［とびお］

結局、俺はエリザが勧めてくれた参考書を買った。

高かったが仕方ない。

それだけ、頭が良くなった気がする。

//渋谷・外

［エリザ］

「アキ男（あきお）！買い物、終わったのね？」

［とびお］

「うわ、待ってたのかよ」

［エリザ］

「待ってたんじゃないわ。あなたがようやく来たのよ。

それで、これからどこに行く？」

［とびお］

……なるほど、何となくエリザのことが掴めてきた。

ちょっと物言いがキツくて常識からズレてるが、

なんだかんだ根はいい子なのかもしれない。

［とびお］

そう思ったとき、俺はエリザに自然と切り出していた。

［とびお］

「そうだ、連絡先を教えてくれよ」

［エリザ］

「……」

［エリザ］

「え、えぇ!?

いま、連絡先を教えてって言ったのかしら？

験担ぎを教えて、の間違いではなくて？」

［とびお］

「験担ぎを聞く必要がどこにある。

また一緒に話せればなって思ったからさ。

互いに連絡先知ってれば、待ち合わせもできるだろ？」

［エリザ］

「そ、そうね……。

それはA男（えーお）にしてはナイスアイデアね。

［エリザ］

仕方ないわ。今日はそこはかとなく気分がいいから、

特別にワタクシチャンサマのIDを教えてあげる。

……光栄ね！　孫の代まで自慢できるわよ！」

［とびお］

「はいはい。それじゃあ、交換っと」

［とびお］

やり方がよく分かっていないエリザをリードするように、

俺はエリザにも俺の連絡先を登録してやった。

［とびお］

俺が作業している間、

エリザはさんざん文句めいたことを言っていたが

彼女の表情は本当に嬉しそうだった。

//ADV形式終了

//2話終了